

報告

児童会活動の中での環境学習

植原 彰

山梨県牧丘町立牧丘第三小学校

Environmental Study in School Children's Association

Akira UEHARA

Makioka Daisan elementary school

(受付日 1992年1月8日・受理日 1992年2月15日)

はじめに

牧丘第三小学校は、秩父山地のふもとの山間地に位置している。校庭の上の斜面ではワラビが取れ、すぐ前を流れる川では（放流ものが多いが）ヤマメが釣れる。

このように自然環境に恵まれている本校の子どもたちも、都市部の子どもたち同様、自然離れの傾向にある。例えば、放課後や休日の過ごし方にしても、親の送り迎え付きで幾つもの塾に通ったり、家に閉じこもってテレビゲームに興じたりしている。また、自然離れが原因なのか、身近な道や川がゴミで汚れていても無関心だし、平気でポイッとゴミを捨ててしまう子もいる。

そこで、筆者は少しでも子どもたちの自然離れをくいとめ、足元の環境問題に気付いてもらいたいと考え、児童会主任という立場から『身近な生き物調査』『あき缶集会』という二つの環境教育的な全校活動を提案した。幸い、職員会議で同意が得られ、児童会執行部の子どもたちも「やろう、やろう」と言ってくれたので、児童会の子どもたち、そして担任していた6年生たちを中心として、この二つの活動に取り組んでみた。

本稿は、その報告である。なお、実践はいずれも1990年のものである。

1. 身近な生き物調査

境の状態が調べられている。これが『自然環境保全基礎調査』である。『身近な生き物の調査』はこの一環として、広く市民の参加を呼び掛けて実施されている。

今回の『身近な生き物調査』（1990年）では、季節や動植物の種類、そして見分け方のむずかしさなどを考慮し、以下の10のコースが設定されていた。参加希望者は、この中から幾つでもコースを選んで、自分の地域の調査をし、コースの動植物がいたかどうかを報告すればいいようになっていた（註1）。

〔気軽な初心者コース〕

- 春の花コース：スギナ・ニリンソウ・キブシ・オオイヌノフグリ・カタクリ
- 鳥の声コース：カッコウ・アオバズク・ヒバリ・オオヨシキリ
- 夏の虫コース：ギンヤンマ・オニヤンマ・アオスジアゲハ・オオムラサキ・カブトムシ
- 虫の声コース：クマゼミ・ヒグラシ・ミンミンゼミ・アオマツムシ・マツムシ

環境庁によっておよそ5年ごとに全国の自然環

〔問い合わせ先〕〒404 山梨県東山梨郡牧丘町窪平1110-3（自宅）

■秋の花コース：ミズヒキ・カラスウリ・セ  
イタカアワダチソウ・オミ  
ナエシ・ヒガンバナ

〔ちょっと専門的なコース〕

■タンポポコース：シロバナタンポポ・在来  
タンポポ・セイヨウタン  
ポポ・アカミタンポポ

■ツバメコース：ツバメ・イワツバメ・コシ  
アカツバメ

■水辺の動物コース：コサギ・カワセミ・ゲ  
ンジボタル・ヘイケボ  
タル・サワガニ

■南の島コース：(略)

■淡水魚コース：ウナギ・ウグイ・オオクチ  
バス・ヨシノボリ

この『身近な生き物調査』に学校をあげて取り組めば、データが集まるばかりでなく、子どもたちが実際の調査を体験でき、しかも、自分たちの地域を見つめるきっかけになるのではないかと考えた。

私たち教師集団は環境教育の側面からと集団作りの側面から、以下の2つの目標を設定した。

目 標

- ① 自然環境を調査することを通して、地域の自然に親しみ、自然に対する関心を高めさせる。
- ② たてわり班単位での活動を通じ、高学年と低学年が関わり合って、よりよい集団を作っていく態度を育てる。

地域の自然に親しむだけでなく、たてわり班という異学年集団で取り組ませることにより、リーダー学年である6年生に指導の仕方を学ばせたり、協力することの大切さに気付かせたりしたい

と考えた。1・2年生は、高学年の子の調査する姿を見せるだけでも、とてもよい勉強になるだろう。

調査は土曜日の『みんなの時間』（学校裁量の時間）を利用した。

児童会行事には1年生を迎える会、七夕集会等いろいろあるので、全部のコースに参加するわけにはいかない。他の行事とぶつからないような時期にできるもので、しかも、調査の対象の生き物の見分け方が子どもたちにも簡単であり、そのコースの動植物の中の一つは必ず地域に生息している等の条件から、以下の3つのコースを選んだ。

- ・ 4月28日——春の花コース
- ・ 5月12日——タンポポコース
- ・ 5月26日——ツバメコース

調査の下準備として、筆者は地域の地図を用意し、学校から1時間内に戻って来れ、だぶる部分をできるだけ少なくした6つのルートを受け持っている6年生たちと相談しながら設定した。そして、一つの班が歩くルートを毎回替えることにした。例えば、たてわり1班が第1回の調査でAコースを歩いたとすると、次回の調査ではBコースを歩くというようにしたわけだ。

一回一回の調査は、以下のように行った。

まず、調査の前日に、受け持っている6年生に調査の仕方や今回調査するルートの分担、調査する動植物についての説明をした。特に、調査する生き物については、実際に野外に出て、実物を確認した。当日は自分たちが指導をしなくてはならないので、子どもたちの目は真剣そのものだった。

当日の2時限目を調査の時間とした。正面玄関前にたてわり班ごとに集合させ、歩くルートが記された地図とシール（直径7mmほどのものを20個ほど）、『身近な生き物調査のてびき』（註1）を各班長に配った。

簡単な開会行事の後、たてわり班ごとに決められたルートを歩いた。安全確保のために、各班には教師が1～2人ずつ付いた。

班員みんなで調査対象の動植物を探し、見つけたら、地図のその場所にシールを貼りつけていった（図1）。班によっては、班長が「○年生は○○

を探してね」と分担を決めているところもあった。

調査とはいっても、半分は散歩のようなものだ。子どもたちはいろいろなものを見つれたり、いろいろな遊びを考えてやりだしたりした。たとえば、タンポポコースの時に、トレーナーいっぱいタンポポの綿毛を付けて「タンポポ人間だぁー」とふざけまわってみたり、みんなで、より花柄の長いタンポポを見つける競争をしたりしていた(図2)。タンポポ笛を作った班もあった。調査対象以外の動植物を見つけて楽しんだりもした。

学校のまわりを歩いて来た後、玄関前で簡単な閉会行事をし、その中で、何班がどんなものを発見したかを発表してもらった。

3回の調査の後、6年生の手によって、集まったデータを身近な生き物調査の調査票にまとめ、環境庁に送付した。

調査後、2～6年生の子どもたち全員に感想文を書いてもらった(1年生はひらがなをまだ完全に習っていないので、書かせてない)。

■カタクリを鈴木先生とさがしました。一番多かったのはツクシ、タンポポ、オオイヌノフグリです。途中でたんぽぽ笛を作って行きました。わたしはぜんぜん鳴らなくて、鈴木先生にもらいました。そしたら、鳴りました。そして、帰りにまた作って、ふきながら帰りました。(4年女)

など、『調査が楽しかった』、『調査以外にもいろいろなものを見つけた』という内容が圧倒的に多かった。

また、以下の感想文のように、これをきっかけに他のものも調べたい、家に帰ってからもやりたいというものもあった。

■カタクリやコブシは見つからなかったけど、とても楽しかったです。また、こういう機会があったら、花じゃなくて、魚や虫を見つけて観察したいです。(5年女)

■こういうことをしていると、なんだかおもしろくなってしまいました。家の回りの花や木もなんだか知りたくなくなってしまいました。自分の家の周りだけじゃなく、ほかのいろいろな所の生

き物も知りたいです。(6年男)

事実、この時間以外にも、自分で調べたいという子がいたので、地図とシールとパンフレットを貸出した。その子は土曜日の午後や日曜日を利用して、家の回りのタンポポ調査をし、それを地図にまとめて持ってきた。

## 2. 空き缶集会

道路や川・山・海など、日本じゅういたる所に空き缶が捨てられている。1年間に約115億個、捨てられている。これは東京ドーム3,000杯以上の体積となる。この空き缶ポイ捨て問題一つをとってみても、日本人の環境倫理の低さがわかる。

この『空き缶』問題は非常に困る問題だが、見方を変えれば、環境教育のすぐれた教材であるとも言える。

- ① 子どもたちにとり、とても身近な環境問題であること
- ② 企業が起こす公害と違って、子どもたちも含めた市民一人一人の意識と行動が原因となっている問題であること
- ③ 子どもたちが実際に行動を起こし、取り組みやすいこと
- ④ 本当に環境はきれいになるし、動植物への被害を少なくすることができること  
\*例えば、空き缶の中に残っているジュースなどを求めて虫が缶の中に入ると、ベトベトのジュースにくっついて出られなくなってしまう。
- ⑤ 環境をきれいにするだけでなく、リサイクルに回すことによって、資源について、環境問題について考えるきっかけとなること  
\*アルミニウムの原料・ボーキサイトも鉄の原料・鉄鉱石も日本は全て輸入にた

よっている。

\*ボーキサイトから新たにアルミを作らず、アルミ缶のリサイクルで作ると、アルミ缶1個で家庭用テレビを3時間つける分の電気の節約になる(註2)。

このように、空き缶を拾い、それをリサイクルに回す活動にはさまざまな意義があることを教職員が学んだ後、以下の3つの目標を定めて、空き缶集会に取り組んだ。

### 目 標

- ① 空き缶を拾い、集め、リサイクルすることによって、たくさんのいいことがあることが理解できる。
- ② たてわり班ごとに協力して、空き缶つぶし・分類・整理ができる。
- ③ 空き缶を出発点に、環境問題に興味関心を持つことができる。

まず、10月第3週いっばいを『空き缶拾いウィーク』とし、子どもたちに空き缶を集めさせた。家から持ってきたり、登校途中で持ってきたり、中には店に話をして自動販売機の空き缶入れの中から持ってきた子もいた。『スポーツ広場にたくさんあったので、グラウンドならしのローラーを使って平らにしました』と日記に書いてきた子もいた。6年生とは、授業時間内にも自然観察を兼ねて空き缶拾いを行った。集めた空き缶は、校舎のわきの目立たない所に置いておいた。先生の中には、自分の家から空き缶を持ってきた人もいた。

10月20日(土)の『みんなの時間』に空き缶集会を行った。プログラムは以下の通りである。

- ① はじめの言葉(児童会)
- ② 校長先生の話(『空き缶と環境問題』。以前に教職員で学習したことをもとに、話をしていただいた。)
- ③ 作業の説明(植原)

#### ④ 作業(たてわり班ごとに)

- ・缶を足で踏んでつぶし、できるだけ体積を小さくする。
- ・缶をスチールとアルミに仕分ける(表示を見てもわからない時は、磁石を使う)。
- ・アルミ缶とスチール缶ごとに、袋の中に入れる。
- ・班ごとの重さを計る。

#### ⑤ 講評(教頭先生)

#### ⑥ おわりの言葉:

作業ではとにかく空き缶つぶしがたいへんだ。思いっきり足で踏みつけるのだが、幾つかやっていると、足が痛くなってしまふ(図3)。これではたまらないうと、翌年の(1991年)集会では空き缶つぶし器を借りてきて行った。

集まった空き缶の重さを班ごとに計った。合計すると、アルミ缶が10kg、スチール缶が50kgだった。土曜日の午後、児童会執行部の中から2人を連れて、回収業者に空き缶を持って行った。

アルミは1kgあたり80円で引き取ってくれたが、スチールはただだった。余談になるが、翌年(1991年)はアルミだけでも昨年の倍も集めたのだが、1kgあたり25円、スチール缶はこちらから処理料を支払わないと引き取ってもらえないそう。これだけ地球環境問題が話題になっていても、足元の現実はこうである。厳しい。だが、だからこそ、学校などが収益のためではなく、教育的な価値を見出して空き缶拾いに強力に取り組んでいく必要があるのではないだろうか。

この項の最後に、空き缶をいっしょに業者まで運んだ6年生の作文を載せる。

#### ■10月20日の3校時に空きかん集会をしました。

道で拾ったり、家にある空きかんを全校で集めて、空き缶集会でつぶすなどの作業をして、再利用してくれる工場に出しに行きました。

みんなが懸命に集めたかんをたてわり班でアルミとスチールに分け、つぶして、袋に入れる作業でしたが、スチールは鉄なので固く、つぶすのに足を痛める人も何人かいました。私もその一人。

その後、先生に重さを計ってもらいました。

アルミは10キロ、スチールはなんと60キロほどもあったそうです。みんなが空きかん拾いに懸命だったことがよくわかりました。すごい！

三校時が終わった後で、私とあっちゃんは工場につぶしたかんを、先生と一緒に出しに行くので、おべんとうを食べました。

おべんとうを食べ、ちょっと遊んでから植原先生の車にかんを載せて、その隣に私を乗せて出発しました。私がかんの隣にいるのはじゃんけんのチョキで負けたせいです。よくチョキで負けますが、今回は特に不運でした。通る場所、通る場所、全て、おかしいと思った人は私の顔を見るので、おかげで注目される有名人となりました。でも、鼻がつまっていたので、かん独自の香りは気にならず、よかったです。

そのうちに土橋商業という所に着きました。まず始めは10キロのアルミかんをお金に換えてもらいました。800円でした。次にはスチールかんをひきとってもらいました。スチールかんは鉄からできているので、磁石にくっつくのです。だから、工場でも電磁石を使ってスチール類を移動・スクラップしていました。

帰った時は『ためになった』『楽しかった』という感情でした。

私達は今回初めて空きかん拾い&集会をしたのですが、とても自然のためによいことをしたと思っています。空きかんを拾えば町がきれいになる、動物が安心していられる、アルミ・スチールという資源が節約できる、お金になる、他にも、『こんなにいいことをした』というすがすがしい気持ちにもなれるんです！（6年女）

### 3. 自分の守備範囲でできることを！

学校の中で環境教育というと、やれ教科がない、やれ時間がない、やれフィールドがない、やれ子どもの数が多い…と否定的な条件ばかりが多い。

しかも、文部省が手引きを作ったり、指導要領が変わったからといって、この状況が少しでも良くなるというものでもない。

筆者は「結局、一人ひとりの教師が、自分のできる範囲内で環境教育に取り組んでいくしかない。たとえば、学級担任は学級担任として、図書館主任は図書館主任として、そして、児童会主任は児童会主任として…」と思っている。

そして、ほんの少しでもいい。何か実践をしたら、それをみんなで分かち合っていきたい。そんな研究の仕方こそが環境教育研究だと思うし、それを学会にも求めていきたい。

### 註

- 1) 環境庁（1990）、1990年身近な生き物調査・調査のてびき。Pp. 64
- 2) アース・ワークス・グループ（1990）、子どもたちが地球を救う50の方法、ブロンズ新社。p. 28



図1 調査対象種を見つけたら、地図にシールを貼っていく



図2

「こんな長いタンポポをさがしたよ」と2年生



図3

缶をつぶし、アルミとスチールに仕分けていく